お月様と虫

久留島武彦

先月の始め、まだ中秋の夜の空の美しい頃、久留島早蕨幼稚園長から、斯ういふ唱歌が出來たからとて編者へ送つて下さつたのが左の一曲であります。季節おくれで折角のお歌に對して却つて如何かと思ひましたけれど、先月はもう十月號の印刷中でありましたし、來年の秋までは待てないし、そこで今月號へ載せさせていたゞくことにしました。(編者)

二調

4/4 1 1 3 5 5 | 6 6・5 0 | 6 5 3 1 | 3 2 2 0 |

チツキサマ　マルク　オヤネヲ　バて
そのーはの　うらで　そのつゆ　レうデす

1. 3 5 5 | 6. 5 i 0 ‖ : i. 6 5 1 | 3. 2 1 0 : ‖

クサバニ　ツユガ　キラキラ　ヒカル
かばいい　むしが　うたうよ　たう

一、お月様まるく
草葉に露が
お家根を出れば
キラ〳〵光る
キラ〳〵光る

二、その葉のかげで
可愛い〻蟲が
その露吸うて
うたふよ歌を
うたふよ歌を

三、あれ〳〵うたふ
お月様までも
皆聲たて〻
とゞけと高く
とゞけと高く

○遊戯

お月様になる兒　一人
お家根になる兒　數人
立ちて肩をくませて、その兒等の數により
五軒、七軒といふ
草になる兒　數人
兩手をのばし、指をひろげ、草の葉のかさなりたる心もちにてかゞむ
露のときには指さきを動かす
蟲になる兒　數人
松蟲、鈴蟲、くつは蟲等子供等の知つて居るといふものを好みによりて選ばせ、これ等の蟲は皆面を伏せて草の葉の下にかゞみ込む
皆が第一節をうたふにつれてお月様になつた子供は兩手の指でお月様をこしらえ、次第にお家根のうしろからお家根の上にさしのぼす。（若し之を遊ぶ幼稚園が田舍か海邊ならば、その土地の實際につれて言葉「お家根を」を「海から」「原から」「山から」といふ風に更め、遊戯も之れに適ふ樣に更める事申す迄もなし）

次に「草葉に露がキラ〳〵で草になつた子供は指さきを動かし、第二節に入つて蟲になつた兒等はそろ〳〵動き出して歌ふ心構へになり、第二節終るや、それ〴〵自分のなつた蟲のなき聲（松蟲になつた兒はリーン〳〵、鈴蟲になつた兒はチン、チンチロリン。がちや〳〵になつた兒はガチャ〳〵ガチャ〳〵の類）を順次に單獨で歌ふ。

そこで子供等は第三節を歌つてしまふと、蟲になつた子等は、各自なるべく調子よく、各自の鳴音を合奏して、おしまひになる。